

## キャンプで唄いました

モンゴルの7月は真夏で休暇の季節です。職場仲間や友人がグループを作り、慰安旅行のようにしてキ



ャンプに行く習慣があります。私も職場の人たち50人くらいと1台のバスに乗って1泊2日のキャンプに参加しました。参加率がよく、所長から清掃係りの人までほとんどすべての職員がいました。助成があるようで、交通費を払うことはなく、食事代だけ集めて食材を買って行きました。中級以下の公務員の給料レベルは決して高くはなく、娯楽も多くはありません。この習慣はみんなで楽しむ機会のように、家族や孫も同行させていました。

キャンプファイアを囲み、歌を歌い、夜遅くまで楽しく過ごしました。そこで私に「北国の春」のリクエストです。演歌を知らない私なのですが、心配御無用。モンゴルでもよく知られている歌を皆で熱唱になりました。このキャンプ旅行をきっかけに職場の同僚との親交が深まり、このような気質は日本人と似ているなど思いました。

(川畑享子)

写真:モンゴル 2006年

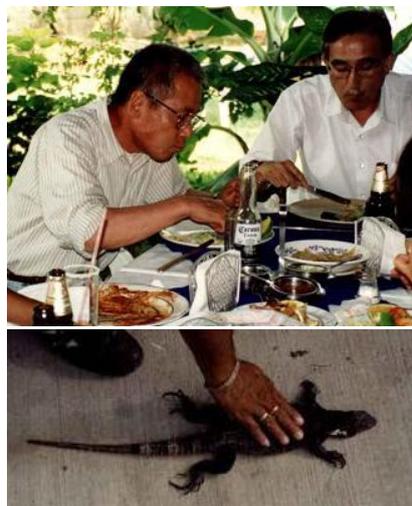
“アールディーアイ通信 No.26/2006”から

---

## イグアナを食す

メキシコ市の隣り、モレロス州での技術協カプロジェクトに従事した折、イグアナを食する機会を得た。イグアナは米大陸に棲む草食性のトカゲ類で、約700の陸棲・水棲種があり、この州には体長50cmほどのクロイグアナが棲む。

料理は、皮を剥ぎ内臓を抜いた5-10cmのぶつ切りを空揚げし、サラダ、隠元豆(あんこ様塩味)、飯またはフライドポテト付き定番のほか、唐辛子入りソースでの煮込みもあり、トルティージャ(トウモロコシ粉のク



レープ)とともに食べる。肉は白身で硬からず軟らかからず、淡白な味で臭みは全く無し。骨の硬いのが気になるが、身離れは良く食べ難いことも無い。捕らえるに難しく、(主に子供たちが)罫や“ばちんこ”で仕留めたものを買って冷凍保存することもある、希少メニューだった。農牧林業試験場では飼育研究が為され、出荷まで2年も掛かるとのこと。子供から買ったほうが効率的と思うが、潜在的需要は高いのであろう。

余談ながら、試験場では強化飼料にコメツキムシの幼虫ハリガネムシを増殖、径1mm長さ2cm程の幼虫は、炒ると香ばしく乙なビールのつまみに。(森田信晴)

写真:メキシコ・トラルティサパン 2001年

“アールディーアイ通信 No.25/2006”から

## こんな風に肌を護ります

ミャンマーの女性も日焼けにことのほか気を使う。ヤンゴン近郊の農業試験場を訪ねた折、圃場作業に従事するお嬢さんとお婦人が、帽子や長袖で肌の露出を避けるとともに、「タナカ」とりどりのデザインで顔に塗っていることに気づいた。

タナカという樹(一見カラタチに似たミカン科の樹)の樹皮や材を石の皿あるいは丸型石硯といった形のチャウピン(チャップン)で水を加えながら磨り、ベージュ色のクリーム状にする。子供は男女とも、大人は主に女性が、このクリームを日焼け対策と、時に化粧を兼ねて、顔面、首筋、のど、腕にも塗る。子供は体全体に塗ることもある。塗るといい香りがたどよい、ひんやりとした清涼感がある。乾くと白っぽくなる。顔全体に



薄くファンデーションとして塗り延ばしてから、頬、額、鼻筋などにさまざまな形や線で独自の模様を上塗りする。同じ模様を見かけることはまずない。デザインのセンスを競っているのか、あるいは個性の主張だろうか。旅行者に塗ってくれることがあるが、大人の男は時と場所を弁えないと趣味と好みを間違われることもあるらしい。

(佐藤 健次)

写真:ミャンマー・ヤンゴン州 2006年

“アールディーアイ通信 No.25/2006”から

---

## 障害者自立に支援を

ボリビア・コチャバンバの身体障害者自立更生施設でボランティア活動をする機会があった。教会から派遣されるシスターが26人ほどの入所者の社会復帰を手伝い、また施設を運営する。その中に野原昭子さんという日本で看護師の経験があるカトリックシスターがいらっやって、その献身的な活動に惹かれた。

事故、病気、医療ミスなどで障害を負った人たちを受け入れ、指導する。施設運営とリハビリ指導が優れていて、自立者や社会復帰をする人が多いという。施設の活動に賛同するボランティアが多く、日本から保母さんのボランティアもきていた。自立して収入を得ることが出来るように、障害の程度に応じて様々な技術指導をする。折り紙作品や紙細工品を作り、また、車椅子でも使える流し台などを製作する木工指導



をする。

リハビリ訓練士や学校教育をする先生の確保費用をはじめ、運営資金の不足に常に悩まされているが、今年6月頃をめぐりに施設拡張を計画していた。5000㎡の敷地に、32人を収容できる、リハビリ施設付き1000㎡の建物の建設が実現していることを、今は別の国で願っている。(川畑 司)

写真:左端の人が野原さん ボリビア・コチャバンバ 2004年

“アールディーアイ通信 No.24/2006”から

## エル・ブリンコ・デル・チネロ

メキシコのモレロス州を発祥とする伝統芸能の一つ「エル・ブリンコ・デル・チネロ(チネロ跳躍舞い)」。スペイン人を髣髴させる、白い肌、大きな碧眼、ピンと張ったカイゼル髭のお面、刺繍と真珠の玉簾で飾り付けられた特大サイズの帽子にビロード服が典型的な衣装。チネロの言葉の由来は諸説あるものの、少数民族のナワトゥル族の言葉で「チネロア」、スペイン語ではメネオ・デ・カデラ、腰骨急激動(直訳、意識不可)が転化したというのが有力のようです。17世紀後半にスペイン人に対する抵抗運動として始まった歴史もあり、現在の形に至ったのはここ100年ほどで、謝肉祭のカーニバルでの村人の衣装、装飾の競い合いが一般化したようです。民族舞踊とは言っても舞いは極めて単調で、壮絶な音量の楽団を引き連れて飛



び跳ねながら村や町を目抜き通りを練り歩く程度。昔は娘達の熱い抱擁を期待しつつ、父から息子へ金と時間をかけ伝えられた衣装を飾りたて頑張った時期もあったようですが、重い衣装で飛び跳ね、練り歩くものの娘達の反応もイマイチ。携帯・ネットゲームに熱を上げる若者達の関心も薄れ、消え行く伝統芸能になっています。(増淵 清)

写真:チネロ跳躍舞い メキシコ・クエルナバカ 2000年

撮影:森田 信晴

“アールディーアイ通信 No.24/2006”から

---

## オーラ! われらラパスっ子

パラグアイ、ラパス市の住民は国際色豊かである。先住民であるガラニー族は少数で、スペイン人などとの混血が多数を占める。戦後、日本、ドイツ、ロシアなどから移民を多数受け入れ、混血も複雑化している。学園祭で売るチーパ作りを楽しむ青年達はまさにその縮図。個性以前の違いが見え隠れする。日系移住者から生まれた少女とドイツ系移住者の親から生まれた金髪の少女とは、見た目だけでない何かが違う。スペイン系の混血の青年の陽気さも独特の民族の色合いがある。次代を担う彼らはまぶしいほど屈託無い。



国際色の豊かさでうらやましいのは、生まれた時から地球上にはいろんな民族がいるということを当たり前として受け入れていること。異文化と意識せずにいろんな民族の伝統文化をいながらにして吸収出来ている。日系人社会の日本文化を守ろうという気骨、ドイツ系の家庭からは完璧なまでに清掃の行き届いた室内外、勤勉さと合理的暮らし方、多数派からは、くよくよしたって始まらないよーケセラセラーのおおらかさを。(高島 章子)

写真:学園祭のチーパ作り パラグアイ・ラパス 2000年

“アールディーアイ通信 No.23/2006”から

## オンセパソ、トゥモールセレブラル、民族の酒・クバリブレ

テキーラと言えばメキシコの代表的酒精ですが、近年の原材料アガベ(竜舌蘭)不足と輸出の伸びの煽りを受け、かつては労働者の愛飲酒であったテキーラは、今では高級品と化しています。昔も今も、メキシコも日本も、酒と涙と「ナニ」は切っても切れないと言う大原則は生きていて、メキシコ人達は当然の事ながら様々な民族の酒を密かに愛し続けています。オンセパソ(11 歩)、トゥモールセレブラル(脳腫瘍)、エレバドール(昇天)、リモナダ・エレクトリカ(電撃レモネード)、デプラバド(退廃)、ママダ(本来は授乳を意味しますが、これは倫理規定上翻訳不可)、ジンやウオッカ、ブランデーをベースに人工着色シロップ、レモンジュース、甘味炭酸水やら、はたまた練乳などを混ぜ込んだ、飲んだら11歩でぶっ倒れ脳腫瘍で昇天間違いなしという恐ろしいシロモノ。しかしその名前のほどのことはなく、暑い日には軽く一杯、爽やかな飲料。なんとと言ってもポピュラーなのは、メキシコの歴史と怨念が凝縮された国民的な酒、ラム酒とコークを混ぜたクバリブレ(自由キューバ)。

(増淵 清)



写真: 恐ろしきもの準備中の屋台 メキシコ・クエルナバカ 2006 年

“アールディーアイ通信 No.23/2006”から

## キューバの英雄チェ・ゲバラ

中南米諸国の大学を訪問すると、校舎の壁に大きく顔が描かれている光景をよく見かける。マルクス主義の革命家でキューバのゲリラ指導者チェ・ゲバラの肖像画である。彼はアルゼンチンで生まれ、本名はエルネスト・ラファエル・ゲバラ・デ・ラ・セルナと言う。「チェ」はアルゼンチンのスペイン語で相手に呼びかける時に使う言葉に由来するあだ名である。1959 年のキューバ革命をカストロと一緒に成し遂げた男で、革命家として日本の坂本龍馬を非常に尊敬していたそうだ(2006 年 2 月 1 日更新ウィキペディアフリー百科事典より)。昨年 12 月、ボリビアの大統領選で左派モラレス氏が当選した。ボリビアはチェ・ゲバラが



39 歳の時に、圧政者の凶弾によって目的を達することなく仆れたところである。こここのところ中南米で左傾化が進んでおり、アメリカも左翼政権誕生と反米意識の高まりに焦燥感を募らせているようである。中南米各国の大学校内で、チェ・ゲバラの雄大な顔が微笑んでいるかのように見える。

(一色 正美)

写真: クンディナマルカ大学校内に描かれたチェ・ゲバラの肖像画

コロンビア クンディナマルカ 2005 年

“アールディーアイ通信 No.22/2006”から

## 世界のタクシスタたち

コロンビアの首都ボゴタ市でタクシーに乗った時のことである。スペイン語が話せるとわかるやいなや、機関銃のような質問攻めにあった。「東京の人口は」「日本まで飛行機でどのくらいかかるのか」「テレビ番組で日本のことをやっていたけど」。時間は 20 分くらい、沈黙は皆無で、気がつくとも目的地についていた。この運転手が特に話し好きというわけではなく、ラテン系の人の大半は喋ることが大好きである。帰国の途中立ち寄ったニューヨークでもタクシーに乗る機会があった。暫くは沈黙が続いたが、話しかけてみると、家族やアメリカ経済のことなどで盛り上がった。しまいには、ニューヨークが世界で一番良い街だと絶賛す



写真:街中を走るタクシー ボディが黄色と決められている コロンビア ボゴタ 2005 年

“アールディーアイ通信 No.21/2006”から

---

## 暑さ・寒さに耐える武漢人

中国の住環境は、北緯 30 度前後に位置する大河「長江」を境として大きく変わっています。長江以北は暖房設備があり、長江以南は冷房設備があります。武漢市はその境界線上に位置する都会であるため、冷暖房整備がありません。冬はマイナス 5 度前後まで下がり雪も時々降ります。一方夏は中国の三大カマドと言われており最高気温 40 度以上となります。庶民のアパートは冷暖房が無いので、冬は寒く、夏は暑く過酷な条件で生活をしています。庶民は冬期間暖かさを求めて、夏は涼しさを求めて、買い物兼ねて冷暖房完備の大手のスーパーや百貨店は大混雑しています。夕方辛い中国料理と強いお酒「白酒」で乾杯して帰宅し、早々にベッドに入るのが庶民の暮らしです。しかし夏の夜は 30 度以下にならないため遅くま



写真:解体中の旧アパートと高級マンション 中国 武漢 2005 年

“アールディーアイ通信 No.21/2006”から

る始末であった。日本でも先日タクシーに久し振りに乗った。最初は沈黙が続いたので話しかけてみた。すると、返事は返ってくるのだがその後の会話が續かない。一概には言えないが、外国人は話さなければ通じ合えないところあがり、日本人は多くを語らなくても通じ合えるところがあるのでは。前者は楽しいけれど疲れるだろうし、後者は面倒ではないが不安であろうと思うのだが如何であろうか。(一色正美)

で周辺を散歩して涼を求めています。それでも暑い場合は公園の芝生にゴザ持参で家族で寝ています。庶民はこれに耐えてきたので、武漢人は大変忍耐強いのです。現在は賃貸アパートから分譲アパートに政策が変更され、高所得者は冷暖房完備の新築マンションに転居しています。貧富の格差は住環境で拡大する一方です。(武漢報告 その2 安達武史)